経済アラカルト ㊺

『日本には尊徳がいた』

東洋学園大学現代経営学部　教授　木村　壮次

東日本大震災では，企業やボランティア活動，個人の心温まる対応があった。しかし政府・東京電力の原発事故の杜撰（ずさん）な処理のため，福島県などの被災者は，「どのように生計をたてればよいのか」と怒りや先の見えない不安が続いている。

経済活動では企業の頑張り・素早い対応によって，メーカーのサプライチェーン，コンビニなどが続々と復旧してきたのは心強い。他方，政治家は，安全保障・領土問題，社会保障改革，TPP参加など，多くの懸案事項があるにも関わらず，政局がらみの駆け引き等，現時点では被災者・国民にとってどうでも良いことで日々を無為に過ごしている。世論調査では，首相に対して，日本を任せて大丈夫かといった不信感が増大している。パフォーマンスのみで，被災者・被災地のための政策を実行しているとは見えない。分刻みで被災地に訪れたものの，被災者から“もう帰るのですか”と詰め寄られ，次の避難先訪問では，“しっかりとか全力をかけてという言葉は聞き飽きた”と指導力・実行力のなさを指摘されていた。『復興構想会議』を立ちあげたが，官僚OB等の起用を排除し，お気に入りの学者や文化人の寄せ集めの場となっているようだ。被災地の知事は“将来ビジョンとか復興”など耳障りの良いことを議論する前に“復旧”を早めて欲しい，“優先順位”が違うと訴えていた。選ばれた委員の中でさえ，百家争鳴（ひゃっかそうめい）で6月の第1次提言がまともに行えるのか危惧していた。

国際面でも，フランスで5月に開催されたG8会議では，原子力発電利用に関しての数字的根拠がなく実現性が乏しい「思いつき，その場しのぎ」の首相演説が国際的にも冷たい反応で終わったという。なぜこのような軽薄な人たちが国の指導者になっているのであろう。

江戸時代の末期，日本には二宮尊徳（幼名，金次郎）がいた。昔の小学校の校庭に多く見られた“薪を背負いながら本を読む”銅像，戦前までの小学校の「修身」の教科書で取り上げられた人物である。今，この尊徳が忘れ去られてしまっている。戦中・戦後生まれの人たちも，金次郎の像が何を意味していたか，教えられた記憶はないという。私のゼミ，講義などで金次郎の像を学校で見たことがあると答えた学生は1割に満たない。

尊徳が残した，人としての生き方，経済・経営などに関しての数々の言葉は，今でも立派に通用する教えであるが，震災に関して言えば，“危機管理”がある。尊徳は成人後，破綻に瀕した600以上の藩や村々を再建しているが，再建（仕法）については「これこそ村（被災地）にとって急務だという仕事についてまずやりなさい。急務のことがみな済んだら新たなビジョンを議論すべきである」と“優先順位と実行”の重要さを繰り返し述べていた。

かつて武者小路実篤は「二宮尊徳はどんな人か。こう聞かれて，尊徳のことをまるで知らない人が日本人にあったら，日本人の恥だと思う」と述べている。内村鑑三も「代表的日本人」の一人として尊徳をあげている。現在，国会議員や企業のリーダーたちの中にも尊徳のことを良く知らない，武者小路や内村が言う，「恥知らずな日本人」が増えていると思われる。こうした人々が日本や企業などの指導者になっている現在，国際的に通用しないダメな日本となってしまうのは当然かも知れない。

明治から昭和にかけて，日本の発展に大きく貢献した渋沢栄一，松下幸之助，土光敏夫などを始めとする多くの名経営者や福沢諭吉も尊徳の教えから学んでいた。稲森和夫も影響を受けている。こうした立派な人々が尊徳を褒め称えたり，その教えを実践してきた理由は，尊徳が残した言葉を噛みしめれば理解できる。

多くの日本人が再び尊徳の教えを学ぶ時がきた，その一助としたいとの思いも込めて，タイトルに掲げた『日本には尊徳がいた』（近代文藝社）を刊行しました。尊徳の“生の言葉”“教え”を読みやすく整理・解説したものです。一読いただければ幸いです。

※記事・写真等は（財）建設物価調査会の許諾を得て転載しています。
著作権は（財）建設物価調査会に帰属。記事、画像等の無断転載は一切お断りします